歌に触れる

遊 縁 の 衆（人生を数倍楽しむ会）

例会作品帳

◎九月二十日

サンプル紹介（黒沼　貞志）

且坐（しゃざ）の席　帰路で見つけし　光る屋根　斜光の下の　夕餉（ゆうげ）を想う

◎十月二十三日（第一回）

（佐藤　紀之）

道ばたの　夜露に濡れし　柿の葉の　多彩な染みに　時を想える

秋空のもと　飛脚人走りたる　歴史に想い　馳せる街道

背後より　前面よりと　走り来る　高知の闇夜　恐れる自転車

幕末の　志士の石碑　寄りかかり　くぼんだ缶を　置ける若者

「龍馬伝」　街を包める　観光の　彩りあれど　流れる日常

朝夕の　空気の湿りに　あの山の　移れる秋を　ここから想う

ススキより　揺れるセイタカアワダチソウ　秋の気配を　すくい取るよう

（佐藤　亮照）

ふと見れば　幼き頃の　落書きに　今の自分の　あゆみを思う

夏過ぎて　いつものごとく　咲き誇る　庭片隅の　秋明の菊

（佐藤　みき子）

木の葉舞う　池に立ちおり　思いける　還暦過ぎこそ　ありがたきかな

（佐藤　志亮）

酷暑から　初秋のたより　彼岸花　諸行無常と　夕暮れの庭

今もなお　学べる時に手を合わす　教えの庭は　真意（しんに）の中に

（松田　昌泰）

生え松の　中より出でし　ライチョウよ　束の間の秋　共に楽しまん

一瞬の　紅葉あざやか　銀玉水　霧にたたずむ　大朝日小屋

時忘れ　話し込む我　しんしんと　冷え込む山小屋　雪間近かな

（黒沼　貞志）

ふと気付く　布団のなかの　足の冷え　暦めくれば　令点の彼岸

紅葉狩り　思わぬ寒さ　かじかむ手　堪えて待てば　微笑むお釜

紅葉狩り　期待のお釜　晴れぬガス　願い通じて　挙がる歓声

白露過ぎ　めくる暦に　期待賭け　彼岸過ぎれば　いつもの訪れ

ふと出会う　かの地の業績　半世紀　想い比べる　我がアンソロジー

且坐（さざ）の席　帰路で見つけし　彩雲に　集う仲間の　家路を想う